海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS 海外事情

# Republic of Türkiye
## — トルコ共和国 —

# トルコでの出来事

**清水 洋平** SHIMIZU Yohei
大日本ダイヤコンサルタント株式会社／地圏環境事業部 地圏環境部 地圏地質室／室長

もんじゃ焼きで有名な東京・月島にある財団法人に出向し、その任期を終えようとしていた私に、当時の部長から一本の電話がありました。「(出向から)戻ってきたら、東北とトルコの仕事、どっちがやりたい？」。それを聞いた私は、1990年代に流行ったTV番組「電波少年」のT部長を思い浮かべました。私は、少し逡巡したのちに、「トルコで…」と答えました。これが私がトルコに関わるきっかけとなり、その後、2年半ほど、トルコと日本を往復することになりました。

ここでは、本誌「Consultant」の読者の方々のバックグラウンドを鑑み、まずは仕事で(特に地質調査業として)苦労した点を述べ、その次にトルコで経験した「人々、生活」、「食事」および「イスタンブール」について紹介します。

### 仕事

トルコは、その地理的関係から、ビジネスは西欧風です。そして、契約金の通貨は全てアメリカドル建てです。これは1990年後半に、トルコは急激なインフレによる経済危機を経験したためだと現地の調査会社の方から聞きました。なお、その急激なインフレを抑え正常な状況にしたのが現大統領であるエルドアン氏です。

地質調査を行う弊社にとって重要な調査方法の一つであるボーリング調査は、トルコでは、日本で一般的である普通工法ではなく、欧米で一般的であるワイヤーライン工法でした。トルコ調査の目的上、(私にとっては通常の感覚で)コア採取率100%を要求したところ、トルコの調査会社の方々からは、「不可能だ！」と言われました。最終的には、日本側からの様々な提供により、目標は達成され、また、その試料を見たトルコの調査会社の社長による「この掘削方法は素晴らしい！」のセリフは、忘れられない思い出です。

個人的に苦労したことの一つが地形図でした。トルコでは、地政学的リスクから、トルコ国外に大縮尺の地形図を持ち出すことは禁じられています。日本では、自由かつ目的にあった縮尺の地形図を使用していた私にとっては衝撃的で、地形図の政治的、軍事的な重要性を改めて感じさせられました。

また、トルコでは、遺跡、遺物の国外流出を防止する観点から、そういったものの国外への持ち出しが禁じられています。我々が採取するような地質調査でサンプリングした試料はそのようなものではないのですが、空港の保安検査官から見れば、遺物であるかどうかの判別ができないため、その規制対象になることがありますのでご注意ください。

### 人々、生活

次に、トルコの人々、生活について述べます。

トルコの人々：正直な話、私は、見かけでトルコの人々を見分けるのは無理です。トルコ人には、西洋人と変わらない風貌(金髪、碧眼)の人がいる一方、いかにもアラブ系といった風貌の方もいらっしゃいます。通訳や調査助手にトルコ人の風貌やその定義について尋ねましたが、その際の彼らの返答は、「トルコ語を話す人間？」といったやや曖昧な返答でした。ただ、様々なトルコの方と話をすると、世界帝国であったオスマン帝国時代の話と現在のトルコ共和国の建国の父であるケマル・アタチュルクの話が必ず出てきます。トルコ人のアイデンティティーにおける、それら2つの重要性の高さを感じました。また、トルコ人は日本人と似て義理堅く、約束をたがわない人が大半でした。ただし、「タビ！タビ！(大丈夫！大丈夫！)」を連呼する人には危険な香りを感じずにはいられませんでしたが、それは日本でも同じではないでしょうか？

**写真1**　ベシクタシュ・パーカーを着た筆者(右から2番目)
筆者両隣が調査助手のトルコ人。現地での私のバースデイパーティー時に撮影。

**写真2**　筆者が愛してやまないエクメック

サッカー：トルコの人たちはサッカーが大好きです。私は、トルコ・プロサッカーチーム・ベシクタシュ(Beşiktaş)のオフィシャルパーカーを気に入り、よく着ていました(写真1)。トルコ人にとっては、日本人のベシクタシュ・パーカーの着用が珍しいのか、果ては、帰国時に出国審査官の方から「(そのパーカーは)Beşiktaşだね。チームファンなの？」と、話しかけられることがありました。トルコ人と話す際には、サッカーが重要であることを感じました。

トルコ語：トルコ語は難しいです！日本人の母音は5つ(ア、イ、ウ、エ、オ)ですが、トルコ語では8つです。そのためか、調査助手などのトルコの方から、私の片言のトルコ語に対し「清水さんのトルコ語の発音はなんか変だね…」と言われました。逆に、私が良く話していた簡単な日本語は、トルコ人の調査助手がほぼ違和感なく発音できるようになったことに嫉妬を覚えました。

### 食事

トルコの料理と言えば、皆さんも一度は食べたことがある「ケバブ」を思い浮かべる方が多いと思います。実は、「ケバブ」は「焼肉料理」といった意味合いだそうで、その前の形容詞が重要となります。例えば、ひき肉にスパイスを混ぜて焼いたものを「アダナ・ケバブ」、あぶり焼きにした羊肉に溶かしバターをかけヨーグルトを添えたものを「イスカンダル・ケバブ」といった感じです。皆さま、トルコでケバブを食べる時には、ご注意ください。

個人的にトルコ料理で最も美味しいのは、トルコの代表的なパンであるエクメック(写真2)だと思っています。エクメックは、誤解を恐れずに言えば、外はカリッ、中はモチモチとしたフランスパンです。トルコでエクメック好きが高じた私が、「昼飯には、エクメックと水だけでOK」と言ったら、周囲のトルコ人から非常に奇異な目で見られました…。その後、同行した日本人技術者の方から、私の行動を日本人のセンスで説明すると「昼飯は、総菜、みそ汁は要らない。白米のご飯だけでいい」といったような類いであることを教えてくれました。皆さま、エクメックだけを食するのには、ご注意ください。

私のトルコでの食に関することとして、「ヨーグルト」が挙げられます。トルコではプレーン味のヨーグルトは、そのまま食するか、蜂蜜を掛けて食べることが一般的です。

ですが、私はパン用に準備されたイチゴジャムを掛けて食べました。それを見た、周囲のトルコ人からは、「何故、ヨーグルトにそんなものを掛けて食べているんだ！」といった様子で、滔々と説得されました。皆さま、トルコでのヨーグルトの食べ方には、ご注意ください。

もちろん、食に関しての話は失敗談だけではありません。トルコの野菜は非常に美味しいです。ともすると、最近の日本では、「野菜の甘みが…」、「美味しさが…」といったフレーズをよく聞きますが、トルコの調査時に、調査地点に行くまでの道端のよろず屋でちょこんと添えられたその日の朝に採れたばかりの不格好だけど激安のトマトとキュウリは、非常に野性的な味であり、これが本来の野菜の美味しさなのだと人生で初めて感じました。

**世界の大都市　イスタンブール**

私の調査地はトルコでも有数の片田舎の土地でした。この地方では、牧畜業が盛んでありノンビリ～とした土地柄でした。昼飯時には、遠い国からの異邦人にもかかわらず、仲の良くなった農家の方から昼飯をごちそうになったりしました（写真3及び写真4）。

**写真3**　調査時にごちそうになった食事
調査時にしばしば近郊の農家でごちそうになった昼飯。パンまたはライスに豆スープといった感じが多かったです。

**写真4**　調査地近くの風景の写真
食事を頂いた農家の２階からの調査地風景。非常にのどかで、昼飯後はうたたねすることもありました。

**写真5**　アヤソフィアの写真

**写真6**　スルタンアフメット・ジャーミィ（別名、ブルーモスク）の写真

そして、トルコ第一の都市イスタンブールは、世界遺産の宝庫であり圧巻でした。数え上げればキリがありませんが、アヤソフィア（写真5）、世界で最も美しいモスクであるスルタンアフメット・ジャーミィ（別名；ブルーモスク、写真6）、エジプシャンバザール（写真7）、アジアとヨーロッパを繋ぐ橋とされるガラタ橋（写真8）など、多数あります。それらの紹介は市井のガイドブックに任せるとして、私からは一言だけ助言させてください。「これらを一日で観光するのは困難ですのでご注意ください」と。

**おわりに**

本原稿の執筆を依頼されてから、撮影した写真を方々から集めました。その際には、仕事に従事した様々な人々や風景を見ることができ、また、撮影することはなかったのですが、不格好だけど野性味溢れるトマト、キュウリの味を思い出しました。

トルコでの仕事は大変ではありましたが、調査地における食事や人々の温かさに感謝せずにはいられませんでした。また、その温かさがトルコ業務の困難を乗り越える動力になりました。

**写真7**　エジプシャンバザールでの写真

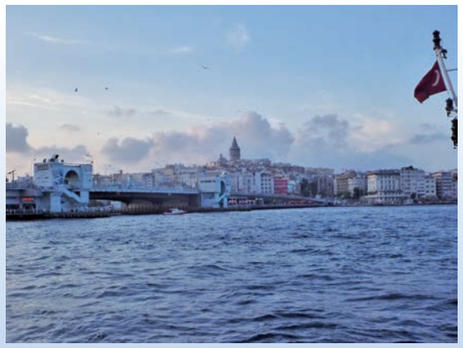

**写真8**　イスタンブールのガラタ橋の写真